企画・取材・発行
射水商工会議所 魅力発信プロジェクト
（事務局）射水商工会議所
〒934-0011 射水市本町２－10－35
TEL：0766-84-5110

発行日
2018年３月１日

富山新港
開港50周年

新湊歴史ヒストリア Volume 4

新湊 潟&港 さんぽ

放生津潟から富山新港へ
華麗な転生の歴史をたどる

闘いと恩恵の潮目で生きる

引用・参考文献
「堀岡郷土史」堀岡連合自治会
「富山新港史」新湊市
「見る新湊近代百年小史」新湊市役所
「新湊市史」新湊市史編さん委員会
「いみずの神社・寺院」射水地区広域事務組合
「新湊のむかしばなし」新湊市教育委員会
「地図にはない湖水」竹脇久雄（文芸社）

協力
射水市、射水市教育委員会、射水市観光協会、富山高等専門学校、
新湊古文書に親しむ会、堀岡福祉センター、
取材にご協力いただいたみなさん、
清水五雄さん

制作
株式会社 ワールドリー・デザイン

海から潟へ。そしてまた海へ。

新湊大橋の下の開港口は、今は海とつながっていますが、
もともとは放生津潟の水量を調節するための堀切の場所でした。

東風 いたく吹くらし 奈呉の海人の
釣する小舟 漕ぎ隠る見ゆ （大伴家持）

人々が行き交い、生まれ変わり続けてきた水門（みなと）のまち

富山県射水市・新湊地区。海の恵みとともに人々の暮らしが営まれてきたのはもちろんですが、海からやってくる異なる地域のものや文化、考え方を受け入れ続けてきた玄関（＝「水門（みなと）」）としての長い歴史があります。

大伴家持の歌にあるように、約1300年前にはすでに漁港としての形ができており、徐々に漁業や製塩、魚の加工の他に海運を生業とする集落ができ始め、約800年前には交易港としてすでに機能していました。人口と産業の集積する水際の陸地（＝湊）であり、海からやってきたモノたちが内陸へと浸透して行くための船の道（＝港）の始点でもありました。ここほど〝みなと〟という名にふさわしい地域はありませんね。

さらなる変貌を遂げたのは、今から50年前。放生津潟を掘り込み、臨海工業地帯を新設し、大型船の行き交う国際的な流通・交流の拠点として、押しも押されもしない立派な〝新港〟となりました。変貌の歴史を辿ってみると、挑戦と英断の連続だったことがわかります。古い歴史や文化を背負いながらも、常に変わり続けてきた〝新しいみなと〟のまちの面白さを、一緒に探ってみましょう。

放生津潟と富山新港の特徴

①恩恵と試練。絶妙な水位の境目で

放生津潟周辺に住む人々は、古来から半農半漁の暮らしでした。フナ、コイ、ウナギ、ナマズなどが生息する天然の養魚地であり、周辺の肥沃な湿地では稲作が行われていました。

一方で、放生津潟には多くの河川が注いでいるため、大雨のたびに潟周りの民家や農地が浸水しました。そこで、海に近い潟の境界線を人力で掘り抜き、海へ排水したのです。この場所は「堀切」と呼ばれました。ただし、排水できても安心はできません。水位が低いままで満潮を迎えると、今度は潟周りの田んぼに海水が逆流し、塩害を引き起こすのです。逆流を防ぐため、今度は土のうを積み上げて堀切を封鎖する必要がありました。

人々に恩恵と試練を与えてきた放生津潟の面影は、今の富山新港の周辺にも実はいろいろ、残っているのです。

②水辺から農地、そして工業地へ

江戸時代以降、放生津潟に注ぐ河川の改修や農地の開拓が進みます。大雨のたびに水浸しになっていた潟周辺は、ほとんどが沼地。土を運び、埋め立てるのはかなりの難工事でした。そこから新たな村ができ、農地が広がり、今はさらに、富山を代表する工業地帯となっています。時代によって鮮やかに転身を繰り返してきたこのエリア。その影には、先人たちの並々ならぬ努力があるのです。

③縦横につながりを生む、玄関口

1300年前から、様々な船—北前船や北洋漁業船、海外からの貿易船、大型の旅客船、ヨットやボートなど—を受け入れてきた〝ミナト〟は、海と陸の玄関役。そして、東西の文化の橋渡し役でもあります。〝ミナト〟は、様々な人やものが行き交い、様々なエネルギーが集まってくる場所。そして異なるものたちが出会い、交ざり、新たな文化を生み出す場でもあるのです。

▲放生津潟空中写真（昭和27年11月）（国土地理院提供）

▲富山新港空中写真（平成28年6月）（射水市教育委員会提供）

用語解説

水と土、闘いと利用のはざまで

放生津潟

潟周辺に住む人々は、放生津潟で淡水魚やシジミを採り、低湿地で稲作を行う、半農半漁の暮らしでした。大雨で水位が上がると、潟が大きな湖のように広がって、そのたびに周辺の田んぼや民家は水浸しになっていました。

▲放生津潟の弁天島（射水市教育委員会提供）

▲現在の富山新港

用語解説

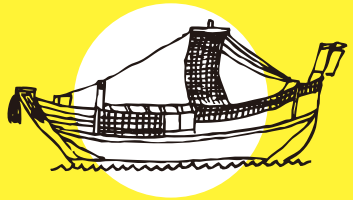
国際物流拠点への華麗なる転生

富山新港

正式名称は「国際拠点港湾伏木富山港（新湊地区）」。潟を掘り拓いて港にし、周囲の湿田地帯を乾田化して臨海工業地帯にするという、〝百年に一度〟の大規模な自然改造が行われ、昭和43年（1968）4月に開港しました。

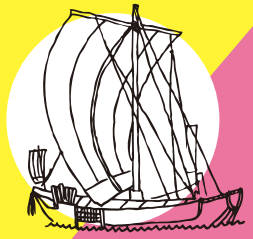
交易拠点の変遷

1200 年代～
廻船（津軽船）



鎌倉時代後期には、津軽通いの大きな船が、日本海を往来していました。十三湊（青森県五所川原市）～放生津湊～敦賀湊（福井県敦賀市）への流通ルートが開けており、盛んな交易がありました。

1600～1800 年代
弁財船（北前船）

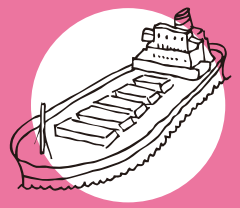


江戸時代も、津軽船ルートが日本海海運のベースとなっており、放生津湊は越中を代表する拠点でした。北海道、東北との交易のほかに、越中の各湊や越後、能登、加賀などと行き来する地廻り海運も盛んで、内川や庄川など内陸の河川を使った舟運と結びついて発展しました。

1800年代半ば～
汽船・西洋型帆船

明治期に入ると、大型汽船の台頭により北前船の船賃が低落。多くの海商が北前船から手を引き、転業しました。一部の者は汽船会社を作り、さらに大規模な海運へと乗り出しました。

1900年代～
タンカー、旅客船等



汽船の就航により、県内の港の機能は伏木港に集中。貨物取扱量が増えるにつれ、港の改善・改良を重ねましたが、港湾機能の拡大と工場用地確保のため、富山新港の造成への機運が高まります。

漁業の変遷

古代～
釣漁

越中国司・大伴家持が奈呉の浦で釣りをする海人を歌に詠んでいます。この後、地曳網、手繰網、はえ縄、刺し網、台網（定置網）などへ発展したと考えられています。

古代～昭和
シジミ漁

天然の養魚地である放生津潟では、フナ、コイ、ウナギなどが獲れました。特にシジミ漁は古代～昭和中期まで行われており、人の手によって増殖され、名物となっていました。

明治
北洋漁業

近海漁業の不漁が連続したため、遠洋漁業が盛んに。タラ、ニシン、サケ、マスなどを獲るため、漁期になると、潟周りの堀岡、明神、海老江などから漁夫が出稼ぎに行きました。

昭和
漁船の動力化

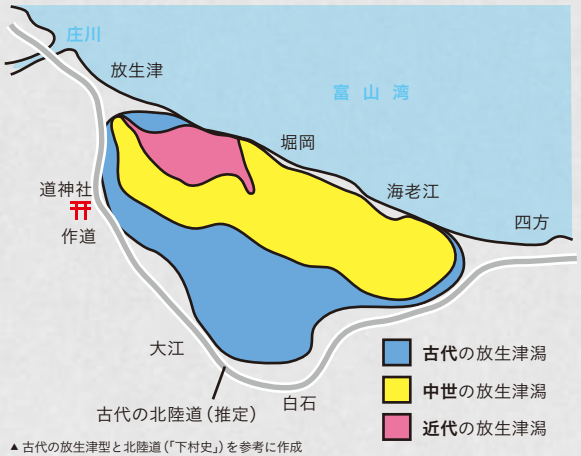
昭和に入ると漁船の動力化や大型化が進みます。昭和後期にはディーゼル機関が主になりました。係留地として内川が手狭になったため、新湊漁港の整備が進められました。

放生津潟の変遷

古代は海水面が今より１メートルほど高く、海岸線がぐっと内陸にありました。当時の射水平野は低湿地が広がり、未開拓で、放生津潟と陸の境があまりはっきりとしていませんでした。

中世になると、海面が下がり、潟は少し小さくなります。しかし、潟周りに住む人はあまり居ませんでした。

近代になると、堀岡の竹脇茂三郎を中心に、一体の乾田化が進められ、沼地は美田へと変わり、次々に村ができてきました。しかし、大雨のたびに潟周りの村々は浸水していました。



▲古代の放生津型と北陸道（「下村史」）を参考に作成

1725～1976 年
乾田化

竹脇茂三郎から続く

1926～1936 年
排水・河川の改修

下条川沿岸排水事業

1937 年～
日本高周波重工業操業

放生津潟北西部を埋め立て

1960 年～
更なる工業用地の造成

1961～1968 年
富山新港造成へ

▲現在の花火大会（射水市観光協会提供）

用語解説

歴史は250年あまり！
花火が彩る、鎮魂の神祭

潟まっつん　かたまっつん

放生津潟周辺の人々は、湖底の泥を掘って稲作の肥料にしていました。しかし、舟が転覆し命を落とす人々が続出し、潟に棲むガメ（大亀）のたたりだと恐れ、明和4年（1767）、潟の中心に小さな島をつくり、ガメを海竜大明神として祀りました。通称ガメ宮では、潟周りの村々が毎年協力し、祭礼が執り行われるようになり、事故がなくなったそうです。祭礼前夜には、潟の中の社地で花火を打ち上げるのが習慣となりました。

県内でもっとも古くから花火をあげているお祭り

富山新港花火大会（とやましんこうはなびたいかい）

Shinminato Fireworks Festival

かつて潟の中にあったガメ宮の祭礼は初夏。前夜には花火が打ち上げられました。数百艘の川船や漁船が家紋入りの提灯をつけ、鳴り物を鳴らして湖面に繰り出す夜景は「舟まいり」と言われ、江戸時代からの名物でした。明治に入ると、屋形船なども出て、さらに多くの人々で賑わいました。富山新港造成のため、約20年間、花火は打ち上げられていませんでしたが、昭和61年（1986）に復活。今は富山新港花火大会として引き継がれています。

開催：毎年7月最終日曜　　**会場：海王丸パーク**

明治16年の資料によると、花火の合計は60本。次の花火が打ち上がるまでの余韻を三味線や太鼓で楽しんでいたようです。

▶昭和30年ころの越の潟花火大会（射水市教育委員会提供）

日本唯一！高純度アルミ製の水の女神

新湊弁財天（しんみなとべんざいてん）

Shinminato Benzaiten

放生津潟の中心に築かれた小さな島の社には、ガメである海竜大明神とともに弁財天と少童命（わだつみのみこと）が合祀されました。社号は少童社に改名され、ガメ島は弁天島と呼ばれるようになりました。河川や水の神であるとともに農耕の神でもあり、音楽、弁舌、知恵、財福、延寿、除災、得勝をつかさどる弁財天。
富山新港の造成をきっかけに片口地区に移されることとなり、昭和61年（1986）、高純度アルミ製、9.2メートルの巨大な立像が新たに建立されました。像の足元は少童社の社殿という画期的なつくり。凛々しいお顔の弁天様は、まばゆい白金のお姿と涼しげな眼差しで、港を行き交う船や人々を見守っています。

▲（左）富山新港造成前の放生津潟全景／昭和38年（射水市教育委員会提供）
▲（右）弁天島に祀られていた海竜社（ガメ宮）／昭和34年（射水市教育委員会提供）

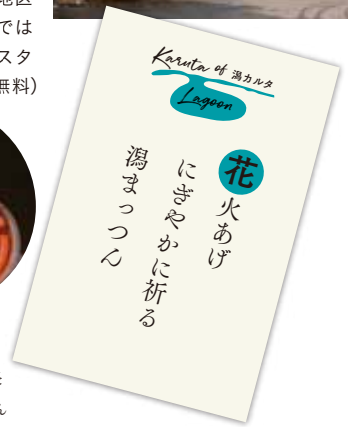
▲弁天まつりのポスター（戦後～昭和30年ごろ）

弁財天スタンプあり

竹泉堂（ちくせんどう）

Chikusen-do

弁財天の立つ片口地区にある老舗菓子舗では少童社参拝記念にスタンプが押せます。（無料）



少童社奉賛会 会長
分家 一嘉さん

用語解説

ダイナミックな日本海物流

北前船　きたまえぶね

江戸時代には四角帆一枚で逆風帆走のできる弁財船が日本海海運の主力となり、幕末から明治初期にかけて、放生津や六渡寺の船が越中廻船の半数を占めた黄金期でした。米や木材を始め、北海道からは昆布やニシン、瀬戸内・上方からは綿、塩、砂糖、石油などを運び、活発な商取引によって財をなした人々が多く輩出されました。放生津や六渡寺の船は、県内随一の数でした。

	船主総代	船頭総代	船子総代	戸　長
放生津	宮林 彦九郎	渡辺 八三郎	網谷 三六	(放生津)
	南島 久七	塩谷久左衛門	柴 武右衛門	吉野 文五郎
	中瀬 七造	宮林 市平	板谷又右衛門	片岡 甚平
	稲垣 藤七	牧　又七	桶谷 喜十郎	泉田 又五郎
	中島 佐久平			(新町)
	大井 清平			堀江 又二郎
	稲垣伊右衛門			(三ケ新)
	牧　七郎平		朽木 五平	桃井 茂平
六渡寺	朽木 清平	朽木七郎右衛門	明野 文三郎	田代 喜七郎
	金木 喜三	串岡 次郎吉		
	朽木 清次郎		寺林十右兵衛	
伏木	藤井 能三	西海 与平	越後与茂三郎	蜂谷 徳平
	八坂 金兵衛	辻 久右衛門		
	堀田善右衛門			
	藤田与左衛門			

明治8年5月15日／出典：『見る新湊近代百年小史』

▲（写真上）北前船・長船丸をモデルに作られた実物の7分の1模型。（射水市新湊博物館蔵）航海の安全を祈る起舟祭で、船霊（ふなだま）を祀るのに使われた。
◀（写真下左）大正15年の東新町通り。板屋根の家が多い。（清水五雄氏提供）
◀（写真下右）現在の東新町通り。

海運業で財をなした人々の面影の残る神社

堀岡神明社　ほりおかしんめいしゃ

Horioka Shinmei-sya Shrine

境内には海運業で財をなした人々が、航海の安全と商売繁盛を願って奉納した灯籠や船絵馬が。帆に一杯の風を受けて疾走する4艘の船を描いた船絵馬は、地元出身の海産物問屋・久星屋押田権左衛門が奉納したものです。

▲堀岡神明社の船絵馬（射水市教育委員会提供）

▲（写真上）現在の貯木場、（写真下）現在の八島倉庫

沿岸航路の拠点港

貯木場、倉庫群　ちょぼくじょう　そうこぐん

Lunberyard field and Warehouses

古くから海運業や漁業などで栄えた新湊。海からやってきた荷物は、小さな船に積み替えられ、内川を通って様々な地域に運ばれました。今でも内川沿いでは古くからの倉庫群や貯木場を見ることができます。
新港として生まれ変わる以前の放生津潟は、もともと天然の貯木場として利用されてきました。昭和30年代には北洋材入荷量が全国20％を超える実績を挙げました。新港造設で新たに整備された貯木場は現在も利用されています。

▶貯木場として活用されていた放生津潟／昭和40年ごろ（射水市教育委員会提供）

近畿大学水産研究所では近年、「越のわたり蟹」増産に向けて、稚ガニの育成も手がけています。

富山湾の沖合に放流されます

▲新たなブランド魚として注目される「越のわたり蟹」の稚ガニ（生後35日）

▲近畿大学水産研究所富山実験場

▶近大水産研究所の隣にある堀岡養殖漁協組と堀岡ヒラメ

▲鮮鋤簾を使っての蜆貝採り（清水五雄氏提供）

解説　放生津潟にはコイやウナギなど多くの魚がいましたが、特にシジミ貝は女性や子供にも商いしやすく行商人がたくさんいました。乱獲などにより漁獲量が減ったため昭和初期から増殖され、地域の名物となってきました。

増殖、養殖が潟の漁業のキーワード！

堀岡養殖漁業協同組合　ほりおかようしょくぎょぎょうきょうどうくみあい

Horioka Fisheries Cooperative Association

115年前に漁業組合ができた堀岡地区。平成6年、近畿大学水産研究所と連携し養殖事業を行うようになったのをきっかけに、平成15年、養殖漁業をメインとした堀岡養殖漁業協同組合に改組。海や池などを囲って育てるのが一般的な養殖と違い、一貫して陸上施設で養殖が行われています。ヒラメやトラフグをはじめ、気候風土に合わせた養殖魚の開発・育成をしています。

用語解説

海岸線に沿って伸びた鉄道

射水線 いみずせん

新湊旧市街をふくむ放生津潟周辺の人々の陸上交通は限られており、富山や高岡への接続は不便でした。そこで大正の終わりごろ～昭和のはじめごろまでの間で、海岸線に沿って鉄道が敷設されました。乗客増加のため、越の潟に海水浴場、八ヶ山に遊園地もつくられました。

ありし日の姿を残す、ふれあいの道

いみずせんあとち

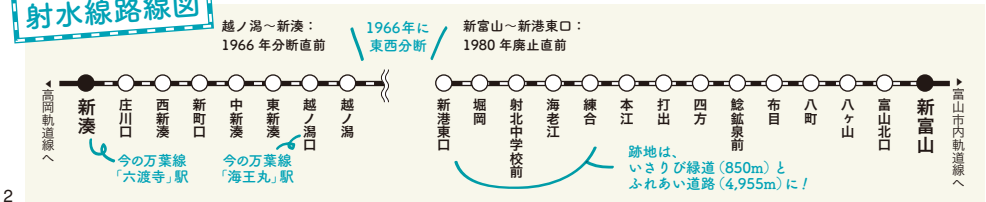
射水線跡地

Imizu Line: The old track remain

新湊～新富山までをつないでいた富山地方鉄道射水線は、1980年まで、新湊市民の大切な足として営業されました。富山新港建設のため港口で路線が切断されてからは利用者が半減し、自家用車の普及による利用者の減少なども相まって、新港東口～新富山までの区間は営業廃止となりました。新湊～越ノ潟までの路線は、新高岡～新湊までの高岡軌道線を運行していた加越能鉄道に譲渡され、現在も高岡～越ノ潟までの万葉線の一部として運行されています。営業廃止となった区間の跡地は、サイクリングロードや散策路として、今も活用されています。

▲射水線堀岡駅（昭和15年ごろ）（射水市教育委員会提供）

射水線路線図



▲現在の越の潟フェリー

橋の代わりにフェリー就航。もうひとつの道

けんえいとせんこしのがたフェリー

県営渡船 越の潟フェリー

Koshinogata Ferry

1967年、富山新港の建設に伴って、分断された鉄道と道路を結ぶため開設されました。2012年に新湊大橋が開通し、市の東西がつながったので、運航当初の目的はすでに果たされたことになりましたが、今も、学生や高齢者の大切な足として、引き続き運行されています。数分の水上移動ですが乗ってみるとかなりワクワクします。

▶フェリーボート「越の潟丸」の進水式／昭和42年（射水市教育委員会提供）

▲三代目堀切橋（右奥）と堀切鉄橋（左手前）昭和8年ごろ（清水五雄氏提供）

解説 大雨のたび、潟の排水のために人力で堀切をするのは、大変な労苦でした。そこで明治初頭、堀切川と水門が整備されます。これにより常時分断される東西を結ぶため、堀切橋が架けられました。災害のたび流失を繰り返しながら、五代目まで架けられましたが、富山新港建設で切断。新たに架かった新湊大橋はいわば六代目堀切橋とも言えるものです。

▲新湊大橋の主塔取付け工事（両方とも射水市教育委員会提供）

しんみなとおおはし

新湊大橋

Shinminato Ohashi

車道&歩道の二層構造としては日本海側最大級の斜張橋

フェリーや迂回道路だけでは不便だとし、富山新港の入口に東西の連絡橋を架けようという動きが1982年頃から出てきます。2002年に建設が始まり、2012年に新湊大橋が開通。翌年には、車道の下層を通る全天候型の自転車・歩行者用道路「あいの風プロムナード」も完成しました。晴れた日には日本海や立山連峰などが一望でき、海王丸パークも望める新たな絶景スポットとなっています。

背景の地図：『庄東耕地整理組合事業計画図』（昭和初期・射水市教育委員会提供）

放生津潟まわりの開拓・開発の立役者

たけわき もさぶろうけ

竹脇茂三郎家

Takewaki Mosaburo Family History

前田利家の時代、能登から射水郡に移り住んだ竹脇家。当主は代々「茂三郎」を襲名しており、放生津潟周辺の新田開発に大きな功績を残しました。もともと武士の家柄でしたが、農家となり、前田家に新田開発を申し出て堀岡に定住し、代々私財を投じて、堀岡の開発に力を注ぎました。一代目与三右衛門が、低湿地帯である明神野の新開を願い出てから、二代目安右衛門、三代～八代目茂三郎、九代目与三右衛門と、次々に干拓を進め、多くの村立を成し遂げました。その後も堀岡に土着し開発や政治の立役者として地域の人々とともに歩んできました。明治21年(1888)の市制・町村制発布の際には、茂三郎の末裔である竹脇敬直が初代村長に。堀岡村は、昭和28年(1953)に新湊市に編入合併されましたが、現在も竹脇家の末裔は堀岡地域に住んでおり、開発の歴史を今に伝えてくれています。

◀「心田開発 竹脇敬茂」と記された石碑は竹脇家敷地内にある。※非公開

ゆかりの地

竹脇家へ入れた鍛冶川跡

せせらぎすいろ

せせらぎ水路

English text text text

堀岡を東西に流れた鍛冶川。今は埋め立てられ、上に排水路が通っています。昔は竹脇家の敷地内を流れ、米などの運搬にも重宝されていました。

昔の堀切橋の場所はココ！

ほりおかふくしセンター

堀岡福祉センター

Horioka Welfare Center

1938年、旧・高畠広吉屋敷跡に建設された堀岡村役場。現在は建て替えられ、福祉センターとなっています。『堀岡郷土史』の購入もできます。

▲昭和13年竣工の堀岡村役場（射水市教育委員会提供）

ポスト北前船時代の海運の先駆者

みなみじま まさく

南嶋間作（1863-99）

Masaku Minamijima

慶応義塾大学を卒業後、一度は新湊で教師となり、26歳で家業である回船業を継いだ間作。当時は海運業・漁業にとって大変革の時期でした。和船による国内交易に限界を感じた間作は、中国に渡り、大型汽船による商売の方法を学びます。帰国後、南嶋商行を設立し、大型のドイツ製汽船「チャイナ丸」を購入。「奈古浦丸」と名付け、中国との定期航路を開拓しました。さらに、汽船で国内の海運業を行う新湊汽船会社も設立します。さらに、古くから海運関連業で栄えてきた地域であるという気概から、地元の有志らとともに商船学校の開設にも奔走しました。今も射水の地から、世界の海で活躍する優秀な船員を養成・輩出し続けています。間作は、享年35歳という短い人生でしたが、日本海貿易の発展と地元産業の発展に大きな貢献をしました。

◀光明寺にある記念碑

ゆかりの地

▲練習船若潮丸と臨海実習場（現在）（富山高等専門学校提供）

島国日本の繁栄のため、優秀な船乗りをつくれ！

とやまこうとうせんもんがっこう

富山高等専門学校

Toyama Mercantile Marine College

▲射水市立新湊中学校にある石碑

1906年、南島間作の別宅を仮校舎にして開校したのが新湊町立甲種商船学校。1967年には国立富山商船高等専門学校となります。地元の人々は「商船」と呼び、紺の詰め襟の制服は女性たちのあこがれの的だったとか。2009年に国立富山工業高等専門学校と統合し、現在は「富山高等専門学校射水キャンパス」となっています。

▲山王町にあった県立富山商船学校（大正期）（富山高等専門学校提供）

◀八幡町にあった富山商船高等学校（昭和期）跡地は射水市立新湊中学校となっている。（富山高等専門学校提供）

大正時代 × ロンドンのモダン建築

まきたぐみ ほんしゃ

牧田組 本社

Makita Group corporate headquarters building

間作亡き後も事業を行っていた南嶋商行の本社として1915年に建造された木骨レンガ貼りの建物。1922年に建築業の牧田組に所有が移って以来、現在も牧田組の本社として保存・活用されています。

新港計画の源流をつくった県知事と射水郡長

吉田実（よしだ みのる）と南原繁（なんばら しげる）

Minoru Yoshida　Shigeru Nanbara

射水平野に生まれ、潟周りで湿田と闘う人々を目の当たりにして育った吉田実は、公選3人目の富山県知事。高度経済成長期を迎えつつある昭和34年の年頭、「野に山に海に」という3大開発計画を掲げました。そのうちのひとつ、海の夢が富山新港の建設でした。100年いや1000年に一度の大工事。利害の渦巻く中での事業推進には多くの苦労があったことでしょう。しかし、県土発展へのゆるぎない信念によって整備は進められ、昭和43年4月、富山新港は完成し、吉田が開港宣言をしました。

吉田が大学で教えを乞うた南原繁は、大正6年から2年足らずの間、射水郡長を務め、潟周辺の乾田化や小杉高校の前身である農業公民学校の設立のきっかけを作るという、大きな足跡を残しました。特に、乾田化は、放生津潟に流れ込む複数の河川を改修する排水事業を軸に、周辺の耕地の整備事業を行うという大規模なもので、段階的な整備と、半世紀以上の歳月を重ね、昭和51年にようやく完成を見たのです。

港湾開発を着実に進めた歴代の首長たち

歴代の町長・市長たち（れきだい ちょうちょう しちょう）

Past mayors of Shinminato City

第5代新湊町長・卯尾田毅太郎は、鉄鋼などの工場誘致を積極的に行い、現在も新港の背後に控える工業地帯の基盤を作りました。その後、戦時下の8年あまりの間は、高岡市と強制合併状態にあったことから、町を二分する論争の末、高岡市より分離します。このとき町長に就任した杉本兵太は、市制施行のため初代新湊市長となり、潟周りを含む7つの村（作道、七美、本江、海老江、堀岡、片口、塚原）との合併も成し遂げました。次の市長、斎藤俊彦は、財政状況が厳しい中、時の知事・吉田実の「野に海に山に」の三大公約を聴き、大きな希望を持ちました。その後を継いだのは新川栄昌。新港建設に向けて急ピッチで進められる整備の負担金の他、漁業補償や用地買収など様々な問題に粘り強く取り組みました。その後のバトンは、元衆議院議員の内藤友明に託されます。なかなか進まない用地買収、最も反対の大きい港口切断などの問題を自らの手で解決し、開港の日を迎えたのでした。

ゆかりの地

臨海開発と住宅整備はセットで！

太閤山ニュータウン（たいこうやまニュータウン）

Taiko-yama New Town

池田内閣の所得倍増計画のもと当時の県知事・吉田実は射水地域総合開発に力を入れました。1968年の富山新港開港とともに、太閤山には大規模な住宅地が建設されました。

美田開発と担い手育成もセットで！

小杉高校（こすぎこうこう）

Kosugi High School

南原繁は、射水平野の新田開発のために下条川、新堀川の改修が必要と大正7年に知事に上申。また、担い手育成のため射水郡立農業公民学校（現・小杉高校）設立を提案しました。

◀開港式（昭和43年4月21日）での吉田実知事の開港宣言

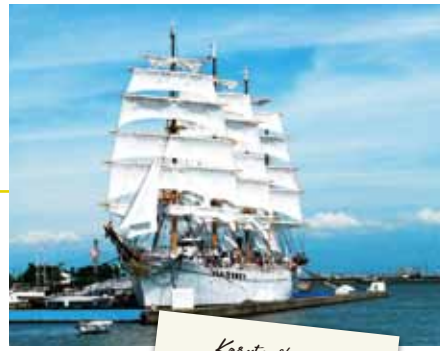
ゆかりの地

航海練習船「海王丸」の展示がメインの観光スポット

海王丸パーク（かいおうまるパーク）

Kaiwomaru Park

商船学校の練習船として誕生した帆船・海王丸。1930年から1983年に引退するまで、地球約50周分、約12,000人の若き船員を育てた船です。大阪市との誘致合戦の末、5年ごとに両都市での交互係留が決定し、1990年に一般公開されました。その後、新たに公園を整備した新湊ベイエリアに永久係留されることとなり、今に至ります。年間10回程度、すべての帆を広げる総帆展帆が行われています。

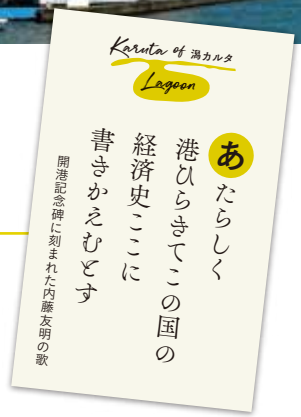


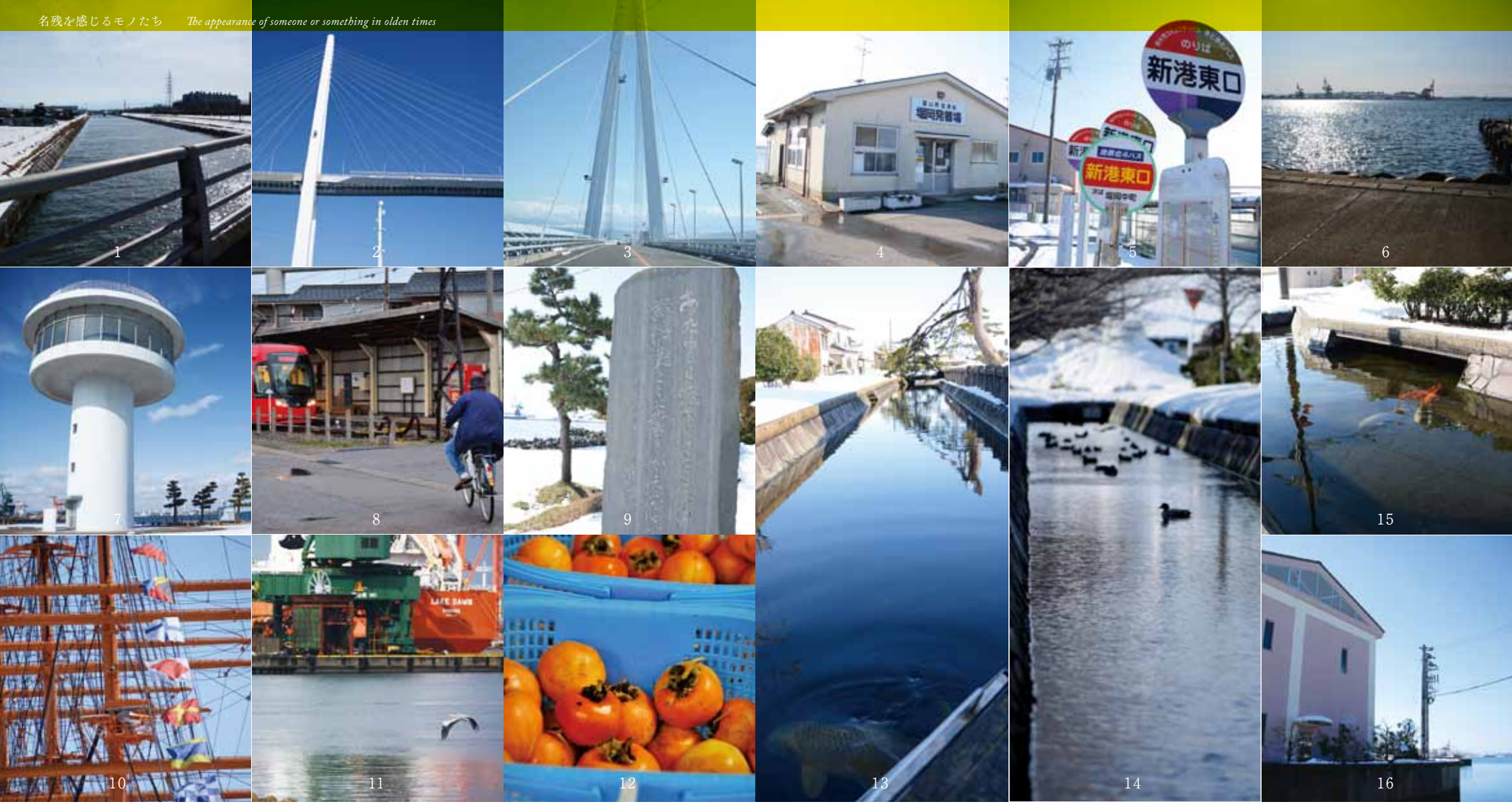
当時の思いがよみがえる

開港記念碑緑地広場（かいこうきねんひりょくちひろば）

Green Square with Open Port Monument

富山新港開港を記念してできた、港口西側の越ノ潟地区にある小さな緑地広場。開港当時の新湊市長・内藤友明の詠んだ歌が、石碑に刻まれています。





潟の記憶を伝えるモノたち

放生津潟は、美田から富山新港へと大きく姿を変えてきました。地図上の水面は小さくなりましたが見えない湖水はさらに広がっているのです。

『堀岡郷土史』執筆者
竹脇 久雄さん

1. 下条川河口｜放生津潟に注ぐ河川の中でも流域面積の大きい下条川。この河川改修によって、潟周りの村々の水害が格段に減りました。　**2・3. 新湊大橋**｜積年の悲願だった東西交通路は、眺めるもよし、実際に渡るもよしの富山の新名所に。　**4～6. 富山県営渡船 堀岡発着場**｜放生津潟の東側の起点。廃線直前の射水線の駅のなごりは、発着場前のバス停にありました。　**7. 富山新港展望台**｜富山新港開港 10 周年を記念して 1980 年に建設された展望台。富山新港のあゆみや港湾の概要などが展示されています。展望台東側には新湊弁財天が。　**8. 万葉線 越ノ潟駅**｜放生津潟の西側の起点。万葉線の終着点・越ノ潟駅と富山県営渡船 越ノ潟発着場が隣接しています。　**9. 開港記念歌碑**｜開港当時の市長、内藤友明の詠んだ句（19 ページ参照）が刻まれています。行き交う大型船を背景にこの歌碑を見ると感慨もひとしお。　**10. 帆船海王丸**｜年に 10 回程度の総帆展帆のときはもちろんですが、帆の張っていない姿も見ごたえがあります。　**11. 富山新港**｜大きな船や貨物が行き交う富山新港。800年以上前から交易港として栄えてきた放生津湊が、放生津潟と合体して今の姿があります。　**12. 水島柿**｜丸くゴマを吹いた外観が特徴。甘くジューシーで美味しい富山名産の発祥は、潟周りの片口村（片口高場）。放生津潟の泥土を使って水稲を作っていた江戸時代の中頃に、前川弥三郎が改良してできた柿。　**13～15. せせらぎ水路**｜昔、十間川と呼ばれた鍛治川。川を埋め立てた上を浄化後の排水路にしています（16 ページ参照）。水路の藻を食べて立派に育った鯉が悠々と泳いでいます。言い伝えの残る「竿とりの松（22 ページ参照）」が今も立っています。　**16. 堀岡雨水ポンプ場**｜昔の「堀切」のような役割を担う場所。雨が降ったときの排水はこちらから。

新湊 潟&港 さんぽ MAP

がめ宮　潟の大亀、恐るべし！

広い広い沼だった放生津潟は越の海とも呼ばれていました。越の海ではいろいろな魚が獲れましたが、沼の泥を田んぼに入れると米がよくできるので、毎年夏にはたくさんの泥掘り舟がやってきたのでした。ある日、新明神の伝吉という老人が若衆を連れて泥掘に出かけたのですが、「もう一すくい」と沼に投げ入れた泥掘器が、びくともしなくなりました。様子をみようと沼に飛び込んだ若者はそのまま命を落としてしまいました。このようなことが年に何度かあったため、沼のガメ（大亀）に命を取られないよう、ちょうど真ん中に島を築き、弁財天を勧請してガメを封じたそうです。

地名がそれを証明する!?

白鳥伝説

垂仁天皇の皇子で、大人になっても物をしゃべらなかった本牟智和気王（ほむちわけ）が、空高く飛ぶ白鳥を見て言葉を発したので、天皇はその鳥を追跡するように命じました。愛知から長野を越えて富山に到り「和那美の水門（わなみ みなと）」でようやく捕まえることができたそうです。

白鳥は昔、鵠（くぐい、くぐ）と呼ばれていました。古代は海岸線がもっと内陸にあったことを考えると、もしかしたらこの久々湊・久々江のあたりで、その鵠を捕まえたのかもしれません。各地にこういう伝説がありますが、地名をもとに歴史をひも解いてみると、言い伝えと現実がダイナミックにつながってきます。

悪者はここに引っかかる！

竿取りの松

堀岡には昔、十間川という川が流れていました。ある秋のこと、その年は豊作だったので、米俵をたくさん積んだ舟が、次から次へと十間川を下っていきました。昼間、この様子を見ていた盗人は、夜に米俵を盗み出しました。舟を進めようと力いっぱい竿をさしたところ、動かなくなってしまいました。舟は流され、男は竿を残したまま、闇に消えて行きました。翌朝、米俵が盗まれて大騒ぎとなりましたが、米蔵の近くの松に引っかかっていた竿が見つかり、盗人も捕まりました。それからというもの、この松には天狗さまがいて、悪いことをした者を懲らしめるのだという話が広がりました。

酒だる　ツラい開墾を宝探しに！

その昔、堀岡の茂三郎が放生津潟周りの荒れ地を加賀藩から開拓するよう任されました。茂三郎が指揮にあたり、老若男女総出で工事をしましたが、なかなか進みませんでした。そんな中、茂三郎は酒だるを荒れ地に埋めよというお告げのような夢を見ました。翌朝早く、お告げと同じ場所に酒だるを埋め、夢のことは村人たちに話しましたが、埋めた場所は話しませんでした。それからは村人たちが酒だるを目当てに、目を輝かせて働き、見事に美田が開拓されました。酒だるが掘り当てられた場所は、本当に「酒樽」という地名になりました。堀岡地区の堀江村の中にあったそうです。

14～15ページの
現在の地図と比べて
みてくださいね！

背景の地図：国土地理院「地理院地図（電子国土Web）」より
※上記の地図上（モノクロ）に、関連スポットや情報をカラーで追記しています。

潟&港関連年表

1792 寛政4年 潟周りVS内川沿い「内川争論」

潟に面した片口村と、内川に面した放生津町との言い争いが発端で広がった、約3年に渡る排水路争い。内川は、多くの河川が注ぐ放生津潟にとって唯一とも言える排水路でした。しかし同時に、船を係留したり貯木したり、荷揚げも行う交易の場所でもありましたから、潟周りと内川沿いの人々との間で、たびたび争いが起きました。1792年、改作奉行がまとめた定書によって、争論は決着となります。❶潟の排水のための内川の江ざらいは潟周りの村々が行う、❷潟が満水になったら内川の木材や船など排水の邪魔になるものは移動させる、❸海側に堀切を切り開く、ということが定められました。

1957 昭和32年 最後の「堀切橋」が架かる

昔から「堀切」という場所はありました。大雨のたびに人力で掘り抜き、排水をしていましたが、やがて波によって海の砂が打ち寄せ、元のように閉ざされていました。そこで、堀切川を掘って水門を設置し、普段は海水が逆流しないよう門を閉鎖し、必要に応じて排水のために開放するようにしました。さらに、この場所は古くから、浜街道の交通の要衝でもあったため、「堀切橋」を架けて東西の通行を確保することになりました。橋はたびたびの大洪水や高浪で流出し、一時期は渡し船で行き来されることもありました。また、堀切川で常時排水されると、潟だけでなく内川の水位も下がり、河川を使った物資の流通に支障が出るとして、内川に面した放生津の人々からの根強い反対もありました。様々な苦難・試練を乗り越えながら架け替えられてきた堀切橋でしたが、富山新港造成に合わせて切断され、役目を終えました。

天平18（746）	大伴家持が越中国司として赴任する
文治2（1185）	放生津に越中守護所が置かれる
明応2（1493）	十代将軍足利義稙（義材）が放生津幕府を置く
元禄2（1689）	松尾芭蕉が堀切を渡り放生津に入る
享保10（1725）	竹脇茂三郎が久々江野の新開工事を譲り受ける
明和4（1767）	放生津潟中央に海竜社（ガメ宮）が建立される
寛政4（1792）	内川争論が起こり江ざらいと堀切の定書が作られる
享和3（1803）	伊能忠敬が測量の旅で堀切を渡る
明治2（1869）	堀切川に初めて橋が架かる（初代堀切橋）
明治23（1890）	南嶋間作が汽船（奈古浦丸）を購入し運輸業を開始
明治24（1891）	堀切川に二代目の堀切橋が架かる
明治29（1896）	堀切川に三代目の堀切橋が架かる
明治36（1903）	堀岡漁業組合が設置される
明治39（1906）	新湊町立甲種商船学校が設立される
明治42（1909）	ガメ宮に弁財天が合祀され少童社に改称される
大正7（1918）	射水郡長・南原繁が射水平野排水事業計画を建議
大正9（1920）	北陸汽船株式会社がウラジオストクの定期航路を開設
昭和4（1929）	越中鉄道 新富山～堀岡間が開通する
昭和8（1933）	放生津潟に水上飛行場を設置する計画が起きる
昭和9（1934）	庄川大洪水。潟周りが浸水する
昭和12（1937）	堀切川に一部鉄筋コンクリートの四代目堀切橋が架かる
昭和32（1957）	堀切川に鉄筋コンクリート製の五代目堀切橋が竣工
昭和36（1961）	富山新港の建設が始まる
昭和39（1964）	太閤山ニュータウンの造成工事が始まる
昭和40（1965）	港口切断反対の監視塔が建設される
昭和41（1966）	堀切鉄橋が切断・撤去され、射水線が折り返し運転に
昭和42（1967）	港口切断。港口を結ぶためフェリーボートが就航する
昭和43（1968）	富山新港が開港
昭和49（1974）	富山新港火力発電所一号機が運転を開始
昭和55（1980）	富山地方鉄道射水線廃止。代替バスが運行
昭和61（1986）	伏木富山港が特定重要港湾に指定される
平成2（1990）	帆船海王丸が富山新港に係留（平成6年 恒久展示確定）
平成6（1994）	堀岡漁業協同組合水産増養殖センター竣工
平成13（2001）	富山県新湊マリーナが完成
平成14（2002）	新湊大橋の建設工事が始まる
平成24（2012）	新湊大橋完成
平成27（2015）	第35回全国豊かな海づくり大会
平成30（2018）	富山新港開港から50周年を迎える

▲町立から県立へと移管したばかりの商船学校（山王町、明治42年）

1906 明治39年 新湊町立甲種商船学校 設立

全国で9番目に設置された日本海側唯一の商船学校。1909年に県立、1967年に国立の商船高等専門学校となり、2009年には富山工業専門学校と統合。「スーパー高専」となりました。海運業界の不況などで廃校の危機が数度ありましたが、現在も新湊で唯一の高等教育機関として、優秀な船員を育てています。
越ノ潟フェリー堀岡発着場の近くには臨海実習場があり、学生たちがヨットやカッターの練習をする光景は、富山新港の風物詩ともなっています。

◀富山新港起工式（昭和36年9月）で参加者に贈られた記念品

1961 昭和36年 富山新港の建設開始

富山新港建設の際、最大の問題は港口の切断でした。主要地方道（現在の県道415号）と鉄道（旧・射水線）で新湊中心部までつながっていた港口東部の人々にとっては、港口切断により市街地から隔絶されてしまうことは、通勤、通学、買い物などの生活面だけでなく、経済的、精神的にも大問題でした。港口切断は最後にと願う地元側と、電線・電話などの敷設や工事の関係で港口切断を急ぐべきとする国側との意見が対立し、長きに渡る交渉の末、1967年11月23日にようやく切断となったのです。

▲富山新港東防波堤の造成工事（昭和41年4月）

▲開港式（昭和43年4月21日）開港第一船三河丸の入港

1968 昭和43年 富山新港 開港

1968年4月21日、記念碑除幕式を皮切りに、富山新港開港式が行われました。記念碑除幕式には、吉田実県知事、内藤友明市長を始め約200名が参加し、その後の祝賀会には関係諸国の大使や領事ら700名が参加する盛大なものでした。
午前11時30分、開港一番に港に入ったのは、日本郵船の三河丸。さらに第十一東洋丸、萩浦丸、ソ連船アレスキー・チリコフ号が港内に入り、4船で、開港式の神事が行われました。3万5千人の見物客が式を見守りました。

歴史ヒストリアチーム、とっておき！

もっと潟＆港を楽しむ方法

今の地図にはないけれど、富山新港になる前に広がっていた放生津潟をイメージしてみましょう。約90年前の地図（14〜15ページ）と、現在の地図（22〜23ページ）とを比べると、土地の開拓や利用の比較ができます。今、立っている場所が、昔どんな地形だったか、そこにどんな暮らしがあったかを、想像してみましょう。

水辺の開発には、移動がついてまわります。❶海底を掘り込んで出た泥土は新たな埋め立て地へ。❷転居を余儀なくされた潟周りの人々の家は太閤山ニュータウンへ。❸港口切断によって分断される交通対策のためにフェリーや迂回道路、橋を…etc.それぞれ独立した存在に見えて、実は一緒に整備されているものが少なくないのです。

富山新港の整備は、地図に残る、1000年に一度とも言われる大工事。時の有力者たちの夢とロマン、その実現のための地道な取り組みがしっかりリレーされたからこそ、今の姿があるのです。時代によって価値観や生活スタイルに変化はあるものの、海からの恵みと交易で栄えてきた〝ミナト〟のアイデンティティを再確認できるはずです。

さらに深く楽しむために…

地元郷土史家に聞こう

今回、「潟」と「港」を調べるにあたって、お話を伺ったのは、地元の郷土史にめっぽう詳しいこのお二人。様々な資料や古文書を読み込んでおられ、〝まるで見て来たことを井戸端会議で話しているみたいに〟分かりやすく楽しい解説をしてくださいました。

前新湊博物館館長
島崎 毅さん

新湊古文書に親しむ会
代表
高嶋 幸子さん

新湊歴史ヒストリアチーム

リーダーの一枚＆一言

しんみなと歴史ヒストリア
プロジェクトリーダー
吉久 磨

日常の中に、非日常がある光景

富山新港が開港する1年前に運行した県営渡船（越ノ潟フェリー）は、越ノ潟と堀岡を行ったり来たり、今日まで沢山の人を乗せてきました。特に目立つのは学生たち。通学路の途中にあるこの渡船に乗り、船上から新湊大橋を横目に見ながら、学校へ向かいます。タイミングが良ければ立山連峰も望むことができる素敵な通学路です。日常の中に非日常が混在している光景ですね。ぜひ皆さんも5分間の非日常を体験してみませんか。なんと運賃は無料！おすすめのスポットです。

更なる進化を遂げる“シン・ミナト”に期待

富山新港が開港して今年で50年。
当時、開港を祝う行事として曳山も出てお祝いムードいっぱいで、子供心に何か新しい事が始まるのだとワクワクしたものでした。
また、富山新港周辺を中心とする富山・高岡が新産業都市に指定された事は、我がまちを誇らしく思ったものでした。
新湊地区は、古くから海の交易が盛んで、海から多くの富を得て来ました。常に時代時代に対応し、進化を続けてきました。そういう意味では、富山新港が出来るのは、必然だったのかもしれません。
ただ、先人たちが知恵とたゆまぬ努力を繰り返した結果である事は、この冊子の中にも記載されています。
今後は、この地域に根ざした風土と先人達の情熱を受け継ぎ、日本海側随一の国際貿易港として、更なる進化を遂げる“シン・ミナト”に期待しています。

先人たちの功績、労苦を忘れずに

昭和43年の開港から今年で50年を迎える富山新港。かつては放生津潟として、周辺に住む人々の生活を支え、現在は大型船の玄関口・国際物流拠点として立派に変化を遂げました。その背景には多くの人々の並々ならぬ努力、新田開発を推進した先人たちの功績、労苦があったことを忘れてはなりません。そんな歴史がある「みなと」のまちの魅力を当時の名残とともにぜひ肌で感じてみてください。

事務局 **買場 啓太、見﨑 華子**

協力
松山 充宏

家持のころから変わらない風を体感して

新港を渡る強い風は、奈良時代の大伴家持のころから変わらない風物です。竹脇家が開いた堀江新村にあった神明社（射水市射水町）に、天保8年（1837）2月、強風で建物が傷んだ記録も残されています。渡船や大橋で体感してみてください。

射水市 **新湊博物館** 定休日 火曜、祝日の翌日
所在地 射水市鏡宮299 TEL 0766-83-0800
開館時間 9:00〜17:00（入館〜16:30）

あとがき　異質なものを受け入れ、アレンジし続けてきた温故創新の〝ミナト〟

新湊の観光地と言えば、内川、漁港、海王丸、そして新湊大橋と言ったところでしょうか。今は名前も残っておらず、地図にも載っていない「放生津潟」を意識することで、これらの場所がすべてつながるということに改めて気づきました。そして、つくづく、新湊は〝ミナト〟なんだよなぁと。様々なものをどしどし受け入れ、試し、アレンジし続けて自分のものにしてきた場所。不便や逆境、時代の試練を超え、理念を持って未来を語り、現実と向きあい続けた先人たちの偉業にひれ伏すばかりです。

撮影・デザイン・編集：明石あおい